

ASEAN グローバルプログラム より得たもの

小池 悠介
Yusuke KOIKE
機械システム工学科 2年

1. はじめに

2017年8月29日から9月7日にかけてベトナムとシンガポールにて ASEAN グローバルプログラムに参加した。このプログラムの主な目的は ASEAN 地域の文化、産業、日本との関わりを学ぶ事と、現地の方々との交流を通じて ASEAN 地域と日本との関わりを実体験から学ぶ事であった。

2. 研修内容

2.1 工場、会社見学

家庭用散水用品で有名な Takagi の工場見学と、ソフトウェアのオフショア開発で急成長されている Rikkei Soft と NTQ へ会社見学をした。工場見学でまず驚いたのが、女性従業員の多さだ。男性従業員は数える程しかいなかった。ベトナムでは男性はあまり働かないと聞いていたが、ここまでとは思わなかった。次に驚いたのが、従業員の方々の勤勉さである。完成した製品に欠陥がないか、何時間も検査していると聞いた。無駄口も叩かず延々と作業しているのを見て、日本人より勤勉で集中力のある国民性を感じた。会社見学では、会社説明をくださったベトナム人の方の日本語が堪能で、その他のベトナム人社員の方々との交流でも、皆さん日本語が大変上手く、英語も混ぜれば何の支障もなく会話することが出来た。これらの会社が日本向けのオフショア開発で急成長されている理由を知ることができた。Takagi は日系企業で、Rikkei soft と NTQ は現地企業であるが、日系企業は組織図の説明から始まるが現地企業はそのような説明をしないなど、重視する点の違いを感じた。また、ベトナムでは平均離職率が 20% に昇るそうで、いずれの会社でも離職

率を下げる努力をされていると聞いた。国柄によって発生する問題もあると知った。

2.2 PBL

ハノイ工業大学では、日越合同班でユニクロの商品をベトナムで売る事を目標に PBL を行った。その中で感じたものが大きく 2 つあった。まず、現地の学生は英語が堪能で、自分の言いたいことを述べられていたが、私たち日本人学生は拙い英語で話していた。そうするうちに、大学の学生に私たちが作ったアンケートを回答してもらおうよう交渉するなど、PBL では英語を「使う」ことに次第に慣れていった。そして、中学生から習ってきた英語に初めて「意味」が生まれた気がした。もう一つは、学生の気質の違いが感じられた。アンケートをとるとき、現地の学生は授業中の教室に入っても多くの人たちに回答してもらおうとしていた。そういった積極性や思い切りの良さなど、見習うべき点が多く感じられた。また、現地の学生は結果を重視し、評価されることを好むと話していた。過程を重視しちな日本とは違うなと思ったし、その方がビジネス向きだなと思った。

2.3 南洋理工大学への見学

とにかくキャンパスが広く驚いた。まさか、キャンパス内をバスで移動するとは思っていなかった。そんなキャンパス内はいろいろな店が立ち並び、巨大なモニターがあり、理髪店があり、携帯が売られておりまるでショッピングモールであった。日本との違いを感じていたが、肝心の講義は日本と変わらなかったように思う。しかしラボは大変広く、そこにソーラーカーなどが置かれていた。しかも、学生たちでそのソーラーカーの PV も自作していた。学生たちは学ぶ事を楽しんでいるようだった。日本の学生にはこういった向学心が抜けていると感じた。そして、楽しむ努力も足りていないように感じた。

3. シンガポールでの研修について

3.1 ビジネスパーソンとの交流

シンガポールで働かされている4人の日本人ビジネスパーソンの方々と交流した。ビジネスパーソンの方も若かったのでとても話しやすい雰囲気であった。そこでは、日本を離れて生活する良さや苦勞など、実際に来た人にしかわからない話を沢山聞くことが出来た。そんな中で4人の方々に共通していると思った事が2つあった。一つは、引き出しの多さである。学生がビジネスパーソンに質問する形で交流していたのだが、1つ質問すると3つも4つも答えが返ってきた。1つの質問に複数の答えを返せるのは多面的な見方が出来ることと、多くの経験に基づく引き出しの多さによるものだと思う。話の種が尽きないのは、その人がこれまで多くの人と関わって学んできたからだと聞いた。コミュニケーション能力の重要性を強く感じた。もう一つは、海外に興味はあったが絶対海外で働こうと思っていたわけではないことだ。これは意外な答えだった。4人とも海外で働こうと思っていたと予想していたからだ。海外に興味はあったが、実際に海外で働くきっかけになったのはほとんどが「縁があったから」だそうだ。会社や友人に海外の話の聞いたりした結果、今に至るという事だった。グローバル化とはよく言ったものだなと思った。少しでも海外に興味があれば海外へのチャンスが与えられるのだ。私は海外で働こうとは思っていなかったが、準備はしておこうと思った。

3.2 加藤順彦さんの講演

ビジネスパーソンとの交流の後、加藤さんの講演会を拝聴した。事前学習として加藤さんの著書「若者よ、アジアのウミガメとなれ」を読んでいたのだが、そこでの印象通りの大変パワフルな方だった。そして同時に、起業家や投資家として虎視眈々と「成長の波」を狙う鋭さも持ち合わせた、面白い人だなという印象だった。講演の中で、「熱量のある所を選べ」という言葉が心に残った。環境が人間を創るのだから、熱量のある所に居れば自分にも熱が伝わるという事だそうだ。「確かに、熱量のある人はきらきらして魅力的だな」と、的を射ているなど思った。私は元々冷めた性分だが、熱を持つためには自分で創るしかないと思っていた。熱のある場所へ行き、熱を貰うというのは私には新鮮で目から鱗の発想だった。講演を終えて、加藤さんの「環境が人間を創る」という言葉の意味をより深く理解できたと思う。環境とは近くの身の回りであり、もっと大きな世の中でもあるのだと思う。より自分に有利な環境（熱量のある人や、成長の波）に行くことで、自分の小さな力も環境により十分大きくなる。苦しいところで戦わず、もっと有利で合理的なところで戦えと伝えたかったのではないだろうか。

4. おわりに

このプログラムでは、自分の足りていない学ぶべきことと、伸ばすべきところの両方が見つかった。これらの課題と自信は、まだ得られただけであるので、これらを解決し、アウトプットすることで、これからの人生に生かしていこうと思う。